

アムステルダム中心部：ジンフェルグラハト内部の17世紀の環状運河地区 ～17世紀オランダ絵画を紐解く～



アムステルダム中心部の街並みは、とても特色があります。アムステルダム中央駅を基点に、環状運河が扇状に広がっている、他では見られない都市構造です。交通手段は、主にトラムとバス。地下鉄もありますが、主要な観光地とは方角が違うので、トラムをお勧めします。港に面した中央駅の反対側は、近年、再開発が進み、現代アートのような集合住宅が建ち並び、斬新な景観となっています。不思議なことに、アムステルダムは運河に囲まれた低地にもかかわらず、この半世紀、水害に見舞われたことが殆どありません。アムステルダム港が臨むのは、海ではなく、淡水のアイセル湖です。アイセル湖は、ワッデン海と全長 30 km以上もの堤防で遮断され、水位が一定に保たれています。この画期的な環状運河システムを活かした 17 世紀の都市整備計画が、世界遺産に登録されたのも、頷けますね。

登録範囲には見どころが凝縮されていて、中央駅、運河クルーズ、マヘレの跳ね橋、歴史ある教会群、人々で賑わうライツェ広場やダム広場……、そして、アート好きな私が一番お勧めするのは、何とんでもアムステルダム国立美術館です。收藏されているのは、世界各国から蒐集品ではなく、17 世紀のオランダの作品で、風景、肖像画、人々の営みなど、当時を彷彿とさせる絵画が充実しています。美術館を代表する、レンブラント・ファン・レインの「夜警」とヨハネス・フェルメールの「牛乳を注ぐ女」は、あまりにも有名な作品ですね。オランダは、アムステルダム国立美術館の他、ゴッホ美術館、デホーヘ・フェルウェ国立公園内のクレラー・ミュラー美術館、ハーグのマウリッツハイス美術館などもあり、世界に誇る美術館の宝庫なのです。また、オランダ出身の画家として、ピーテル・ブリューゲル、フィンセント・ヴァン・ゴッホ、マウリッツ・エッシャーなどがいます。日本でもよく展覧会の開かれる、錚々たる顔ぶれですね。



アムステルダム国立美術館

さて今回は、レンブラントとフェルメール、日本でも有名なふたりの画家と作品に着目してみましょう。



「レンブラントの自画像」



「画家芸術」

※後ろ姿のフェルメールが描かれているとされる

レンブラント（1606年～1669年）とフェルメール（1632年～1675年）は年齢差が26歳で、彼らが同時代を生きていたことはとても興味深いです。ちなみに、ピーテル・ブリューゲルは、ふたりより100年ほど前の画家です。レンブラントの絵は、聖書に基づいた作品や肖像画や集団肖像画など、パトロンから依頼されたものも多く、自画像も数多く残しています。また、代表作の「夜警」のように壮大なスケールでドラマを描く大作もあり、作品や作風は多岐に渡っていて、17世紀当時からオランダを代表する画家でした。一方、フェルメールの絵は、身近な人、静物、街角の風景といった生活に密着した題材が多く、まさに地元根付いた画家といってもいいでしょう。庶民の日常を描くことは、当時としては先駆的であり、後の印象派の画家たちにも大きな影響を与えました。また、フェルメールの作品は、他の画家と比べて比較的小さいサイズです。当時の画家が広い工房で描くことが多かったことに対し、フェルメールは自宅のアトリエで描いていたのが、その要因のひとつでしょう。ふたりの間に親交は無かったようですが、無かったことが、かえって良かったと思います。もしあったら、フェルメールの作風が、レンブラントの影響を受けて、少し違った作品になっていたかもしれません。というのも、レンブラントは意外と筆使いが大胆で、肖像画などは何層にも絵の具を塗り重ねて厚みを出し、額のしわの感じなどは、実物そのものです。加えて、スポットライトのような光の入れ方が巧みで、明暗のコントラストを活かし、主人公を強調するのが、特徴的です。フェルメールの絵は小さい作品が多いので、できれば至近距離で観たいものです。よく見ると、その緻密さに驚かされます。市販の油彩画用の筆では、あそこまで緻密には描けません。画家も相当、試行錯誤して完成させたのだと思います。



「夜警」



「牛乳を注ぐ女」

レンブラントとフェルメールが活躍した17世紀半ば、お隣のベルギーでは、バロック絵画（16世紀末～18世紀中頃まで）が隆盛を極めており、ピーテル・パウル・ルーベンス（1577年～1640年）が時代の寵児として人気を博していました。ルーベンスの作品は宗教画、祭壇画、肖像画などの大作が多く、王侯貴族に気に入られました。外交官としてスペインに赴任した際は、スペインの画家ディエゴ・ベラスケス（1599年～1660年）と親交を深めて、お互いを支え合った間柄です。レンブラントとフェルメールはルーベンスとも特に親交は無かったようですが、隣国同士の、この同時代に生きた彼らがお互いを意識し合っていたら、どのような秀作を後世に残したことでしょう。想像しただけでもワクワクしてきますね。

17世紀のオランダ絵画は、当時のイタリア、スペイン、ベルギーなどの絵画と比較すると、とても柔らかい感じがします。宗教よりも庶民の生活に向けられた題材が描かれた絵には、どこことなく温かみがあります。風景画は、空の面積の占める割合が高く、雄大でかつ素朴です。長閑なオランダの原風景は、当時を偲ばせます。

ところで、オランダの世界遺産は干拓や水利システムなどに関係する文化遺産が多いのですが、国内の旧市街や歴史地区での登録がないのは意外でした。デルフトはフェルメールの過ごした街で、デルフト焼きでも知られていますし、ライデンはシーボルトゆかりの地で日本とも関係のある街、デン・ハーグは13世紀から続く由緒ある街で美術館の宝庫でもあります。その他、オランダにはドルドレヒト、ユトレヒト、グローニンゲンなど、歴史ある街がたくさんあります。

また、オランダと日本の歴史を語る上で欠かせないのは、江戸時代の長崎・出島での貿易です。江戸幕府から国交を公認されていた唯一の国が、オランダです。日本文化が、出島からオランダを通じて、ヨーロッパに広がり、また、この出島を通じて、ヨーロッパの文化や西洋医学が日本に入ってきた、と考えれば、「出島にける西洋と東洋の交易の歴史……」のような名称で世界遺産に登録してほしいと、密かに願っています。文化的価値観の交流があるとして、登録基準は(ii)が良いですね。しかも、トランスバウンダリー・サイトで…

オランダは魅力いっぱいの国です。私がお勧めする旅は、「列車の旅」です。というのは、オランダは鉄道網が発達していて、観光地のライデン、デルフト、ハーグ、ロッテルダム、ユトレヒト、どの都市へも、列車で1時間以内の距離。駅から市街地へも徒歩圏内なので、とても移動しやすいです。今回の旅も、アムステルダム、ライデン、デン・ハーグ、デルフトと周り、ベルギーのアントワープ、ブリュッセルと列車で移動しました。時間の都合で、いつものスピード旅行となってしまいましたが、たまにはのんびりと旅したいものです。

オランダは世界に誇る美術館の宝庫と述べましたが、最後に、お勧めの美術館をひとつご紹介します。日本ではあまり知られていませんが、デン・ハーグにある「パノラマ・メスダグ」です。美術館の展示作品は、オランダの風景画家ヘンドリック・ウィレム・メスダクが19世紀後半に描いた360度のパノラマ、「スヘフェニンヘンビーチの風景画」、1点のみ。高さ約14m×幅(円周)約120mで、オランダ最大の絵です。展望スペースから絵の描かれた壁面までの間、数メートルが本物の砂場になっていて、絵と繋がっているかのようです。100年以上前の、かつての漁村風景が広がり、まるでタイムスリップした気分になります(写真が発明される前は、パノラマ絵画が主流でした)。この1点の作品のためだけに建てられた、珍しい美術館です。



「パノラマ・メスダグ」

西洋画というと、フランスやイタリア、スペインなどを思い浮かべがちですが、オランダ絵画もそれに勝るとも劣らず、一見の価値があると思います。皆さんもオランダを旅することがあれば、ぜひ、美術館に足を運んでみてください。